メディア時評

住民の不安に応え続けてほしい

若松 丈太郎
詩人
（福島県南相馬市在住）

私は東京電力福島第1原発の北25キロにある自宅で暮らしている。昨年3月の「核災」（核による災害）発生から4日後、私たち夫婦は自主避難し、35日後の4月19日、避難先の福島市から帰宅した。自分の「場」で暮らしたかったことに加え、75キロ北西の福島市より南相馬市の放射線量が低かったからである。ほどなく「緊急時避難準備区域」に指定された自宅一帯は、5カ月後の昨年9月30日、指定が解除された。

だが、解除後も、多くの住民の不安は消えていない。住民が最も知りたいのは、福島第1原発がどんな状態にあり、作業が順調に進んでいるのかということだ。

毎日新聞9月11日朝刊特集「東日本大震災から1年半」はそれに応えた。それによると、福島第1原発1～3号機から、現在も1時間あたり最大約1000万ベクレルの放射性物質が放出されているとみられるという。作業員が近づけない場所があり、炉心冷却で生じる汚染水の増加も廃炉作業を妨げている。格納容器内の溶融燃料をすべて回収し廃炉となるまで30～40年を要するという。核災は「終息」していないのだ。

その後も、トラブルや作業事故が相次いでいる。9月22日、3号機の使用済み燃料プールに約470キロの鉄骨が落下、10月2日には第1原発敷地内で、汚染水処理による高濃度放射性廃棄物から発生する水素ガスの排気用ポンプから白煙が出た。11月2日には第1原発内で電源ケーブルが誤って切断され、窒素供給装置が一時停止した。

東日本大震災後、福島県や近隣県では体感地震が頻発している。11月3日朝にも、福島県沖を震源とする地震で震度4を観測した。揺れが収まり、まず脳裏に浮かんだのは、福島第1原発に異常がないかということだ。「情報不足」の下、人々は「また避難を強いられるのでは」と不安を抱えながら暮らしている。

福島第1原発3号機で78年に臨界事故とみられるトラブルが起きていたことが、29年後の07年に発覚した。それを機に、私は08年、「みなみ風吹く日」と題した詩で、東電の事故隠しとごまかしの体質を告発した。

「気の遠くなる時間が視える／世界の音は絶え／すべて世はこともなし／あるいは／来るべきものをわれわれは視ているか」

だが、その後も東電の体質は改まらず、「核災」は起こってしまった。住民の不信感はさらに深まった。

福島第1原発のどんなささいなトラブルも、近隣住民には命にかかわる情報なのだ。漏れなく報じ続けてほしい。それらの情報があれば、住民は推測し、判断し、行動につなげられる。

（東京本社発行紙面を基に論評）